

## 最上の賜物

<箴言 10・12>

憎しみはいさかいを引き起こす。愛はすべての罪を覆う。

<1コリントの信徒への手紙 12:27～13:3>

12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。

12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。12:29 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。12:31 あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。

13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。13:2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

使徒パウロは第二次伝道旅行の時に一年半をコリントに滞在していましたが、そのときに建てられた教会がコリント教会です。コリント教会があったコリントという地域には大きな二つの港があり、貿易が盛んに行われ、多くの商人と旅行者が往来していました。従って、様々な国の文化や風習が入ってきたし、多様な人種、多様な階層の人がいました。アテネほどの学問的な所ではありませんでしたが、コリントに住んでいる人たちはギリシャ哲学に対する関心が高く、自分たちの知識を誇る人が多かったようです。性的にもとても墮落していた地域で、姦通するという意味で、コリント化する、コリント人のようだという言葉が出るほどでした。そのような影響はコリント教会の内部にまで及び、そのような問題がいかに深刻なことであったのかがパウロの手紙を通して分かります。何よりもコリントには多くの偶像崇拜の神殿があり、その神殿境内では合法的に買春行為が行われていました。そのような地域に建てられたコリント教会には、生活面だけではなく、復活を否定したりする教理的な面でも問題があり、熱心ではあるが派閥と争いが絶えませんでした。使徒パウロは離れていても、そのようなコリント教会のために涙をもって祈り、心を配りながら、いくつかの手紙を送りました。その中の二つの手紙が聖書に含まれていません。

今日朗読したところは第一の手紙で、13章は愛の讃歌として皆さんに親しまれたところです。

その前の文脈を見ると、コリント教会の中にはいろいろな賜物を持っている人が多く、神秘的な体験を重んじていたようです。自分が持っている賜物を誇るあまり、他の人の賜物を軽視する雰囲気まであったようです。使徒パウロは、体には多くの部分があるが、それがすべて一つの体であって、皆がキリストの体としていくら弱く、小さく、見えないようなものであってもすべてが必要不可欠なものであることを伝えています。

そう言いながらも、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい、最高の道を教えますと言っています。自分の賜物が一番のように誇る人たちのことを意識している言葉です。どこまで言うかという、あなたたちはそれぞれの賜物を誇っているが、私が言うこの賜物がなければ、あなたたちが持っている賜物はすべてがむなしい、無駄であると、厳しいことを言っているのです。最上の賜物、最高の道が何かというと、愛です。

天使のような異言を語ろうとも、愛がなければ騒がしいどら、やかましいシンバルである、つまり、聞くに辛い、耐えられないほどの雑音であると言っています。そして、劇場で役者の声を引き立たせるために使われたその楽器を使って熱狂状態の礼拝をしていた異教徒の騒がしさにたとえて言っているのです。イエス・キリストの福音とは全く関係がないと言っているのです。また、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、山を動かすほどの完全な信仰をもっていようとも、愛がなければ無に等しいと言っています。いかに厳しく、怖いほどの話でしょうか。全財産を貧しい人のために使い尽くそうとも、命がけての英雄的な献身も、愛がなければ何の益もないとも言っています。いかなる献身も、いかなる徳も、身を全部ささげるようないかなる善い行いも、愛がなければ無に等しい、価値がないのです。

来たる日、大勢の人が言いました。「主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行いました」そのときに主はこのようにおっしゃるんだそうです。「あなたたちのことは全然知らない。不法を働くものとも私から離れ去れ。」あまりにも厳しいお言葉です。

マルコによる福音書 12 章 28 節からを見ると、確かにイエス様は、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。そして、隣人を自分のように愛しなさい、とおっしゃいました。それが私たちに与えられている神さまの掟です。

ですから、わたしたちは主を愛しているから、礼拝を守り、奉仕し、献身します。そして、神を愛するゆえに、隣人を愛し、愛せない人を愛そうと眠れない夜を過ごします。主が愛しなさいとおっしゃったから愛したくなくても愛いしようとするのです。ゆるせない人をゆるそうと祈り求めながら、自分と闘います。ときには骨が削られるような痛みがあるかもしれません。主のためなら損することも我慢します。報いを望まず与えようとします。わたしたちは真理を求め、真実に生きようとします。伝道のために、屈辱も、迫害も喜んで受けようとします。それが神を愛し、隣人を愛することだからです。ここで言う愛はロマンティックな話ではないのです。痛く、苦しいことです。ときには、私の本能が拒否しようとします。ここで言う愛は感情ではなく、意志です。

その愛に関する具体的なことを使徒パウロは言います。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

このような愛は相手を変えるより、自分を変えないと成し遂げることができないのです。相手の問題より私自身の問題です。相手がどうであれ、私が愛するか、しないかは、私の側の決断によるのです。

このような完全な愛が私たちにとって、本当に可能であるのでしょうか。では、不可能なことを使徒パウロは言っているのでしょうか。

使徒パウロは 15 章 31 節でこのように呼びかけています。「兄弟たち、わたしたちの主キリス

ト・イエスに結ばれてわたしが持つ、あなたがたに対する誇りにかけて言えば、わたしは日々死んでいます。」主と共に日々死んでいると言っています。肉と欲情や欲望すべてを十字架に付けてしまったのです。(ガラテヤ 5:24)

神様はこの世を愛して、その独り子を私たちに与えてくださいました。

主は罪人を愛し、捨てられたような者たちの友になりました。主はご自身に近づくものを誰も拒否しませんでした。彼がどのような姿であれ、受け入れ、希望を与えてくださいました。それで、徴税人ザアカイが変わり、娼婦マリアが新しい人になりました。

自分を裏切る弟子たちを最後まで愛し、わたしたちのために十字架で死んでくださったのです。その十字架を通して示された主の愛を絶えず仰ぎ見、十字架の中に生きようとした使徒パウロは、十字架の主と共に歩むとき、隣人をゆるし愛することが可能であることを知っていたのです。私たちのすべての罪を十字架によって覆ってくださった方が、愛を求める者に愛する力を与えてくださることを知っているのです。だから、大きな愛の賜物を受けるよう熱心に努めなさいと勧告しているのです。愛は与えられるものです。私たちは自ら愛を造りだすことができないのです。

預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れても、愛は永遠です。過ぎ去るものではないのです。愛は決して滅びません。その愛が私たちのうちにあるとき、私たちはすべてを持っている者であるのです。しかし、愛がないときすべては無です。なぜなら、愛以外にはすべて無くなるからです。そして、愛である神様とは関係がないからです。

愛する人のみが神様を知り、最後の日、神様もその人を知るとおっしゃることでしょう。

主イエスはご自身を売るためにユダが出て行った後に、弟子たちに言われました。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したようにあなたがたも互いに愛しなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るようになる。」

海老名教会がこの世に存在する理由は、主がそうであったように、私たちが互いに愛し合うために、また、その愛を伝えるためであるのです。

祈ります。

神様、

私たちのために十字架での苦しみを受けてくださったあなたの独り子主イエス・キリストを信じます。私たちのすべての罪を、主の血潮によって覆ってくださったことを信じます。

私たちのこの信仰と献身が虚しくならないように、どうか私たちのうちに主の愛を注いでください。どうか、愛を求め、その愛に生きる勇気を与えてください。愛の賜物を与えてください。

救い主、イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。 アーメン。